

タオル（重松清）

寺田守



一 作者と作品について

重松清（一九六三〜）は、岡山県久米郡久米町（現・津山市）生まれの小説家。中高と山口県で過ごし、山口県立山口高等学校を卒業した。出版社勤務を経てから、一九九一年に作家としてデビューした。一九九九年に『ナイフ』で坪田譲治文学賞、『エイジ』で山本周五郎賞、二〇〇一年に『ビタミンF』で直木賞を受賞した。その他にも多数の作品を発表している。

「タオル」の初出は『オール讀物』二〇〇四年一〇月号。その後『小学五年生』（二〇〇七年三月）に収められた。『小学五年生』は一七篇の作品が収められた短編集で、いずれも小学五年生の男の子が主人公である。「タオル」は中国地方の方言を用いた港町を舞台にした物語である。

教科書には平成二四年から『中学生の国語 一年』（三省堂）および『伝え合う言葉 中学国語2』（教育出版）に掲載されている。重松清は小中の教科書に多くの教材が掲載されている人気作家である。

二 叙述について

祭壇のすぐ前に座っていた父は、その人が来たのを知ると、玄関まで迎

えに出た。

「すぐ前に」とあるので、父は祖父のそばに座っていた。それが、玄関に、ではなく、「玄関まで」とあるので、わざわざ玄関に移動してまで客を迎えた少年が判断していることがわかる。他の客に対してはおそらく玄関に迎えに行くことはなく、父にとってその客がそれほど丁寧に扱うほどの大切な人だった。

父は照れくさそうに「似とるんは勉強のできんところだけですわ。」と言って、客を座敷に招き入れた。

「照れくさそうに」とあるので、少年が父に似てると言われ、父が気恥ずかしくてきまりがわるそうな様子であることがわかる。顔が似ていると言われているのに、勉強ができないことが似ていると返すこととでごまかしているところが、照れくさそうな様子を表している。「だけ」とあり、他のところは似ていないと言っている。「招き入れた」とあるので、仕草や言葉で座敷に入るように促した。

今朝からずっと——ほんとうのことを言えば、二日前に祖父が亡くなったからずっと、家のどこにいればいいのかわからずにいた。

わからないのは少年であり、語り手が少年の視点で説明している。「ほんとうのことを言えば」とあるので、今朝からというのは、思い

返してみると誤っていた。お通夜の今日は今朝からあわただしいのでどこにいればいいのかわからないというのはよくわかる。しかし、祖父が亡くなった二日前からということから、人が少なく、あわただしくなかった時から、少年は居場所がなく落ち着かなかった。つまり、どこにいればいいのかわからないというのは、単にあわただしいからということではなく、祖父の死に対して少年が落ち着かないということの意味している。「ずっと」とあり、おちつかない状態が長く続いている。「わからずにいた」とあるので、「わからなかった」と比べると、時々わからなくなるのではなく、四六時中わからない状態であった。

「邪魔になるけん、外で遊んどりんさい。」と母に言われ、家の前でサッカーボールを蹴っていたら、目を真っ赤に泣き腫らした叔母に「こげな日にふらふら遊んどったらバチが当たるよ。」と叱られた。

「なるけん」は、なるからという意味。「遊んどりんさい」は、遊んでいなさい。「こげな日」というのはこのような日という意味で、祖父が亡くなったような日。「真っ赤に」とあるので、目が充血して赤くなっている。それほど叔母は涙を流した。「叔母」とあるので父または母の妹、あるいは弟の妻。「ふらふら」というのは、考えや目的がなく落ち着かない行動をする様子。叔母は祖父が亡くなった時にもかかわらず、少年が考えもなく遊んでいると思っている。

しかたなく家に入ってテレビをつけると別の叔母に「音を出したらいけんよ。」と言われ、マンガを読んでいたら漁協の組合長が「おじいちゃんのおそばにおってあげんさい。」と酒に酔った声で言っ、そのくせ祭壇の設けられた広間に行ってみると、大人たちが集まっ、座る場

所などどこにもなかった。

「しかたなく」とあるので、少年はどうしようもないと思っている。

母には外で遊べと言われ、叔母には遊んでいたらバチが当たると叱られ、困っている。「そばにおってあげんさい」とは、そばにいてあげなさいという意味。祖父に対するやさしい発話だが、「酒に酔った声で」とあるので、大きな声で、滑舌の悪いしゃべり方だと分かる。息も酒臭かっただろう。「そのくせ」とあり、それなのにと逆接の意味だが、少年の不満が表れている。「行ってみると」とあり、ためしに行く」という意味。少年は行っても駄目だろうと薄々予想している。「など」とあるので、座る場所なんて、という意味。思った通り場所がなかった。

それは、わかる。

「それ」とは、おじいちゃんが死んだということ。「は」とあるので、他のことはよく分からないが、それに限ってはわかっている。

それも、わかる。

「それ」とは、おじいちゃんが死んだのは悲しいことだということ。「も」とあるので、先のおじいちゃんが死んだということがわかることに加えて、おじいちゃんが死んだのは悲しいことだということもわかっている。

それだって、ちゃんとわかっている。

「それ」とは、悲しいときには、泣いてしまうということ。「だって」とあるので、おじいちゃんが死んだということや、それが悲しいこと

だということがわかるのと同様に、人間は悲しいときには泣いてしまふというあたりまえのこともわかっている。「ちゃんと」とあり、十分に、まちがいなくわかっていると少年は思っている。

自分の居場所を見つけれないと、ゆっくり悲しむこともできないのかもしれない。

「ゆっくり」とあるので、急がず、ゆとりをもって悲しむということ。悲しむのに「ゆっくり」とはどういうことなのだろうか。少年は祖父が亡くなった悲しみを実感できていない。頭では理解していても、まだぴんときていないのだろう。だから悲しむためには、祖父をしみじみと思い出しながら、急がずにゆとりをもつ必要があると考えている。

「居場所」というのは、ここでは祖父の祭壇に対して座る場所のことである。だが、少年にとっての居場所とは、祖父の死に対しての構え方でもある。少年にとって身内の不幸は初めてのことなのだろう。祖父の死をどのように悲しめばいいのか、少年にはまだ理解できていない。悲しむことが、でなく、「悲しむこと」とあるので、うまく居場所を見つけないと、ゆっくり悲しむことさえできない、まして泣くことなんてできない、と少年は考えている。

客のほうも、焼香を終えたあとは広間にいる理由をなくしてしまったように、どこか居心地悪そうだった。

「客のほうも」とあるので、他の人が客を意識しているのと同じように、客も他の人を意識していると少年は考えている。「どこか」とあり、はっきりと指摘することはできないが、居心地悪そうな様子が何

となく伝わってきた。客は他の人と会話をしたり、何かの作業をしたりといったこともなく、座ったまま手持ちぶさたな様子だったのだろう。客を感じる居心地の悪い状況は、少年の居場所のない状況とよく似ている。二人とも、祖父の祭壇を前にして、自分が何をしたらいいのか分からず、とまどっている。

「ほいで、どうせおまえはここにおつても邪魔になるだけじゃけえ、お通夜が始まるまでおじちゃんのお世話して、町の案内でもさせてもらえや。」

「ほいで」とは、それだという意味。「どうせ」とあるので、父は少年が邪魔になると初めから決めつけている。そして、間違っていない。「だけ」とあり、邪魔になる以外に何も無い。役に立たない。「じゃけえ」は、だからという意味。「でも」と言っており、町の案内を例として挙げているが、たいして深い意味がないことがわかる。シライさんに町を案内する必要はなく、父は、少年がすぐに家に戻ってこないように何か用事を与えようとしている。

夕方の風の時間にさしかかって、風が止まり、よどんだ潮のにおいが濃くなっている。

「さしかかって」とあり、風の時間でなかったところから、その時間に入ってきたことがわかる。「よどんだ」とあるので、空気の流れがどこおって、入れ替わらず、息苦しいような潮のにおいがした。毎日生活している少年ですらこのように感じたのだから、シライさんにとっては強烈なおいだっただろう。

ヤツカイバライの意味はよくわからなかったが、なんとなくシライさんが「俺たちは同じだな。」と言ってるんじゃないかと感じて、それがちよつとうれしくて、少年は自分から話しかけてみることにした。

「ヤツカイバライ」とカタカナ表記になっているのは、少年が言葉を知らず、漢字も思い浮かばないためだろう。他の箇所のシライさん、ケンパイも同じだと思われる。「よく」とあるので、全くわからないのではなく、なんとなくは理解している。追い出されたという程の意味だと理解しているのだろう。「なんとなく」とあり、シライさんの先の発言からはっきりとした理由があるわけではないのだが、どこことなく少年は感じ取った。「同じだな」とあり、「同じだ」と比べてみると、「な」があることで、同じだという主張に念を押し、少年に同意を求めていると理解している。少年は、「二人まとめて厄介払いされちゃったな。」というシライさんの発話を、「俺たちは同じだな。」という意味だと理解し、反応した。「ちよつと」とあるので、そこまでうれしいわけではない。少しだけうれしい。「みることにした」とあり、話しかけることを試みようとしてみた。少年はシライさんが自分と同じだと考えている気がして親しみを覚えたので、自分から話しかけることに決めた。

祖父をほめられてうれしかったのが半分、残り半分は、シライさんの話にうまかついていけたことで、うれしいというより、ほつとした。

「ほめられてうれしかった」とあり、少年は祖父のことを誇りに思っていた。「うまく」とあるが、期待通りに話についていけたという意味。だから「ほつとした」と、安心して緊張がとけた。「ほつとした」とあることで、逆にこれまで少年が緊張していたことがわかる。居場所のなさや居心地の悪さを、シライさんに対しても感じたらどうしよ

うと不安に思っていたのだろう。

ほんとうはよくわからない。

「ほんとうは」とあるので、少年はわかっている振りをした。嘘をついた。「よく」とあるので、あまりわからないが、なんとなくは理解している。少年は、父の昔の写真を見たことがあるので、髪型の映像は思い浮かぶ。しかし、その髪型がリーゼントだということは知らないし、リーゼントという言葉の意味もわからない。

少年は少し足を速めた。

「少し」とあり、いくらか歩く速度を上げた。たくさんの写真を見ることが楽しみに思われ、早く見てみたいと感じた。「速めた」なので、自然と足早になったのではなく、意識して早く行こうとした。それくらい楽しみだった。

酔味噌で食べると、酸っぱさの奥でじんわりと甘みがにじむ。

「じんわりと」とあるので、ゆっくりと徐々にしみ出してくる。「にじむ」とあり、ベイカの素材の甘みがしみだしてきて口の中に広がったことがわかる。

はげしていない頃の写真を見せたらおじいちゃんは恥ずかしがるだろうか、とクスツと笑いかけて、ああそうか、と頬をすぼめた。

「はげしていない頃」とあるので、現在のははげている。「だろうか」とあり、少年はおじいちゃんが恥ずかしがることを予想している。「クスツ」というのは、声をだしてあははと笑うことでなく、口をつむり、

鼻から息を軽く吹き出すような遠慮した笑いのこと。「笑いかけて」とあるので、まだ笑っていない。頬の筋肉に力が入り口角が上がっている状態。あるいは、シライさんに対して笑いかけた、つまりシライさんに笑顔を見せたと読むこともできるが、シライさんと祖父の頭髪の話題をしているわけではないので、ここでは前者（まだ笑っていない）の笑いかけた、という意味だろう。「頬をすぼめた」というのは、頬をへこませるのではなく、口角があがっている状態から頬の力をゆるめて表情をなくすこと。少年は、おじいちゃんがまだ生きているかのように想像したが、すぐにおじいちゃんはもう亡くなっており、恥ずかしがることもないのだと気づいた。

おとといから何度も思ってきたことなのに、いま初めて、それが悲しさと結びついた。

「何度も」とあるので、もうおじいちゃんと話すことができないということを繰り返して思ってきたことがわかる。「初めて」とあり、話すことができないということも思ってもこれまででは悲しさがなかった。「結びついた」とあるので、両者がばらばらなものだったが、ここにつながった。少年は、初めて悲しいことだということを実感した。

いつもだ。

ここでの「いつも」は、常に、どんなときでも、という副詞の意味。祖父は漁をしているときは、常にタオルを巻いていた。

「ほら、この頃はまたお父さんの雰囲気、あんまり漁師らしくないだろ。」
祖父に注目し、祖父のことを考えていた少年に、シライさんは「ほ

ら」と父へ注目するように促している。写真の父に対して「まだ」とあるので、今は漁師らしい雰囲気になっている。「あんまり」とあり、その頃は今の父から予想する姿と違って、たいして漁師らしくない。顔つきや姿勢が違うのだろう。

「漁師を継ぐのは嫌だ嫌だって、俺と酒を飲むと文句ばかり言ったんだ。」

「ぼっかり」とあるので、ただ文句だけで、他には何も言っていなかったと限定している。実際はさすがに文句しか言わないというわけではないのだろうが、シライさんにとっては、昔の父は酒を飲むと文句しか言っていなかったような印象を持っていることがわかる。父も最初は漁師になろうとは思っていなかった。

「仲良くなったっていつでも、俺は東京だから、年賀状のやり取りぐらいいしかできなくて、おじいさんが生きてるうちにもう一度会って写真を撮りたかったんだけど……でも、昨日ハジメさんから連絡もらってうれしかったし、けっこうスケジュールはキツかったんだけど、ボクに会えたから、やっぱり来てよかったなあ、って。」

「ぐらい」とあり、年賀状のやり取り程度しかしていなかった。疎遠になっていた。「もう一度」とあるので、シライさんはさらに加えて一回祖父に会いたかった。「でも」とあるので、シライさんは祖父と再会できなかったのは残念だが、それ以外でよかったことがある、と考えている。「うれしかったし」とあるが、ここではうれしかったのという理由を表す意味でなく、うれしかった上にさらに、という並べて強調する意味。「けっこう」とあり、シライさんが思っていた以上にス

ケジュールがキツかった。「やっぱり」とあるので、様々な事情で来るんじゃないかと思う理由もないわけではないが、最終的には、祖父のお通夜に行こうと思った時の予想通り、来てよかったと考えている。「って」とあり、いい差し表現になっている。続く言葉は、そのように今は思っているよ、というような表現か。シライさんの最も長い発話。一文であれこれ語っているのは、シライさん自身の葛藤や迷いを語っているためだろう。またビールを飲み始めているので、酒が入った発話であるということもあるだろう。

間違いない、これはおじいちゃんの字だった。

「間違いない」と思えるほど、少年の知っているおじいちゃんの筆跡と、年賀状の筆跡とが一致していた。少年はおじいちゃんの字をよく知っている。年賀状の内容は、「三代で船に乗れたらうれしいことです」とあるのだが、少年は内容には反応していない。

「ボクは大きくなったら、なにになりたいんだ？」

特別に見せてやるといって、三代で船に乗れたらうれしいと書かれた年賀状を見せたのだから、シライさんは、少年が祖父や父の後を継ぎ、漁師になりたいと言うことを期待しているのだろう。

照れくさかったが、正直に「Jリーガー。」と答えた。

「照れくさかった」とあるので、気恥ずかしくてきまりがわるいと感じている。どうして照れくさいのだろうか。一つには、Jリーガーになりたいという希望が、非現実的で夢のようなものであることを少年も自覚していて照れくさかったのだと考えられる。または、シライ

さんが漁師になりたいと答えることを期待しているのを感じ取ったものの、実際は違う答えだということに照れくささを感じたということも考えられる。後者だと考えると、年賀状の内容に反応せず、あえて筆跡に反応したのも照れくさかったからだと考えられる。父が照れくさそうに話題をそらしたように。だが、少年はまだ小学五年生であり、職業としての漁師を真剣に考えたことはないはずである。だから、シライさんの暗黙の期待にも気づかなかったのではないだろうか。年賀状の筆跡に目を向けたのも意図的でなく自然な反応だった。つまり前者のJリーガーという夢が照れくさかったのだと考えられる。それでも「正直に」とあるので、うそをついたりごまかしたりせずに答えた。

シライさんは「そうか、じゃあもっとたくさん食べて、もっと大きくならないとな。」と笑ってくれた。

「もっと」とあり、さらに、今以上にという意味で重ねてつかっている。シライさんは期待した答えと違って、おそらく多少がっかりしているだろう。けれども父がそうだったように、少年も漁師になりたいと思っただけでもないとも予想していたかもしれない。Jリーガーという子どもらしい答えが返ってきたので、スポーツ選手を目指すどのような答えにでも使えるあたりさわりのない大人の反応をしている。「笑ってくれた」とあり、少年はシライさんがあきれたりたしなめたりせずに、笑ってうけとめてくれたことを肯定的に捉えている。

『みちしお荘』にいた頃はあんなに仲良しだったシライさんが、家に着くとあっさり大人の仲間に入ってしまったのが、ちょっと悔しかった。

「いた頃は」とあるが、「いた時は」と比べてみると、『みちしお荘』

でシライさんと会話をしたことが遠いことであると少年が感じているということがわかる。実際は通夜まで会話をしていたのだから数時間前の出来事である。「あんなに」とあるので、あれほど仲良しだったと仲良しだったことを強めている。実際は数時間会話をしただけであるが、少年はシライさんととても仲良くなったと感じていた。一週間の滞在で祖父や父と仲良くなったシライさんは、少年の家族とウマがあうのだろう。「あっさり」とあり、簡単に大人の仲間に入ってしまった。「しまった」とあるので、少年はシライさんが大人の仲間に入っただけとは思っていなかったことがわかる。「ちよつと」とあるので、少しだけ。とても悔しかったわけではない。「悔しかった」とあるので、少年とだけ仲良しでいて欲しかったシライさんを大人たちに取られてしまったことに寂しさを感じ、敗北感を持っている。あるいは、少年も大人の仲間に入りたかったと考えるならば、シライさんに敗北感を持っていても考えられる。あんなに仲良しだった、と修飾しているので、ここでは前者（シライさんを取られて悔しい）という意味だろう。

おとといまではこの家にいた人のことを、もうみんなは思い出話にしてしゃべっている。

「もう」という言葉からは、思い出話にするにはまだ早いという少年の考えが分かる。祖父は、病気を患っていたわけではなく、脳溢血で突然亡くなってしまった。周りの人間にとつても、祖父の死を覚悟する時間もなく、突然の出来事だったはずである。おとといには元気に歩き回っていた人間のことを、過去の人のように思い出として語ることができるというところに、少年は違和感を覚えた。みんなはおそ

らく葬式に慣れていて、その場にふさわしい振る舞いを身につけているのだろう。みんなはゆつくり悲しんでいる。けれども少年は、まだ祖父の死を思い出にできるほど整理して受け入れることができない。

涙は出なくても、だんだん悲しくなってきた。

「だんだん」とあるので、悲しみが少しずつ大きくなっていった。どんどん、だと勢いよく悲しみが積み重なっていく様子だが、「だんだん」だと、時間をかけて徐々に悲しくなっていく様子がわかる。ここでの少年の悲しさは、おとといまでは元気だった祖父が、すでに過去の人間のように思い出として語られていることに感じる悲しさである。少年は祖父が過去の人になってしまったことに直面して、悲しさを実感した。

手を伸ばしかけたが、触るのがなんとなく怖くて、中途半端な位置に手を持ち上げたまま、しばらくタオルを見つめた。

「伸ばしかけた」とあるので、手を伸ばし始めてその途中で動作を止めた。「なんとなく」とあるので、理由ははっきりとわからないが、触るのが怖かった。「しばらく」とあり、長い時間ではないものの、すぐともいえない程度の時間じっと見つづけていた。

ほいで、今もそうなんじゃろうかと思うて棺おけをのぞいてみたら、やっぱリデコが白いんよ。

「ほいで」は、それで。「そうなんじゃろうか」は、そうなのだろうかという意味で、おじいちゃんやんのデコのところが白いのじゃろうかという疑問。「のぞいてみたら」とあるので、確認するために棺おけの扉か

らためしにのぞいた。「やっぱり」とあるので、予想通りだった。

じゃけん、のう、シライさん、じいさんをええ男にして冥土に送ってやらんといけんものう……。

「じゃけん」というのは、だからという意味。「のう」は、ねえと呼びかける言葉。シライさんに同意を求めている。「ええ男」とあるので、デコのところ白くなっている祖父を、父はええ男ではないと思っっている。父にとってええ男とは、漁師としての祖父である。「いけんものう」は、いけないからねえという意味。「……」とあるが、父の発話は最後まで言い切っており、省略されていない。ここでは、涙声になって聞き取りにくくなり、声も小さくなった父の言い方を表している。

「やっぱり、タオルがないとおじいちゃんじゃないから。」

「やっぱり」とあるので、結局は、ということ。「おじいちゃんじゃない」と言っているが、タオルを巻いていなくても祖父は祖父である。シライさんや父は、祖父を漁師として送ろうと考えている。

シライさんも「そうだな、写真撮ってやるよ。」とカメラをかまえた。

シライさんはカメラをなぜか持ってきている。タオルを取りにきただけなのにカメラを持ってきたということは、最初からタオルや少年がタオルを巻く様子を撮ろうと思っていたのだろう。「シライさんも」とあるので、父がタオルを巻くように促したのに加えてシライさんも巻くように促した。

額にきつく巻き付けた。

「きつく」とあるので、ただタオルを巻いただけでなく、ずれたりはずれたりしないようにしっかりと巻いた。祖父が漁に出る前に、キユツと巻きつけたように少年もこれから漁にでるかのように巻きつけた。ここから、少年が祖父や父の後を継いで漁師になると決意したのだと読むこともできなくはない。しかし、ここでは父やシライさんに促されて巻いたのであって、少年の意思で自ら巻いたわけではない。そして、Jリーガーになりたいという希望がなくなったわけではない。そのため、ここでは、漁師になる決意をしたというよりも、漁にでる祖父を思い出しながら、祖父の真似をしただけである。

まぶしさに目を細め、またたくと、熱いものが、まぶたからあふれ出た。

「熱いもの」とは涙のこと。「あふれ出た」とあるので、目いっぱいにたまっていた涙が、目を細め、まばたいたのをきっかけに流れ出した。カメラのフラッシュがたかれた瞬間に泣いたのでなく、それまでに涙がたまっていた。祖父の死に対して、涙が出てこず、悲しいかどうかもはっきりしなかった少年だが、少しずつ悲しみを感じていった。それでも涙は出なかったが、タオルの潮のにおいや、父が目元をこする仕草の中で、少年も涙をこぼした。少年は居場所を見つけた。

かすかな潮のにおいは、そこにもあった。

「かすかな」とあるので、少しだけ感じられる様子。ここでの潮のにおいは、涙のしよっぱさのこと。タオルの潮のにおいに対して、涙の潮のにおいがかすかだということ。「そこにも」とあるので、タオルにあるのに加えてまぶたからあふれ出た熱いものにも潮のにおいがあった。

三 考察

少年は、祖父が亡くなってからずっと、家のどこにいればいいのかわらなかった。居場所がなく、落ち着かない様子だった。しかしそれは、あわたましいという理由だけでなく、祖父の死をどのように悲しめばよいのかわからないためだった。

おじいちゃんが死んだということはわかっていても、それが悲しいことなのかどうかも実感できていなかった。さらに、悲しいことだとは頭では理解していても、涙が出てくることもなかった。「タオル」は祖父の死にどのように向き合えばよいのかわからない少年が、最後に居場所を見つけ、涙を流す物語である。

そんな少年が祖父の死を悲しいと実感できたのは三つの出来事があった。第一にシライさんの写真を見て、おじいちゃんがまだ生きているかのように想像した時、もうおじいちゃんと話すことはできないことと悲しさが結びついた。さらに第二に叔母さんたちが、おととまで元気に歩き回っていた祖父のことを過去の人のように思い出話にしてしゃべっているのを聞いた時、少年は悲しくなってきた。それでも涙は出なかったのだが、最後に祖父のタオルを額にきつく巻き付けた時、すぎきれなかった潮のにおいをおじいちゃんのおいだと感じ、少年は涙を浮かべた。祖父の死をどのように悲しめばよいのかわからない少年だったが、祖父がまだ生きているかのようにふと想像したこと、まわりの人が祖父をもう過去の人のようにしゃべっていたこと、そして祖父のにおいによって、当事者として悲しみを実感することができ、涙を流した。

もう一人の人物であるシライさんも、はじめ他の人と会話をすることもなく居心地の悪い状況だった。少年の居場所のない状況とよく似ていたために、少年はシライさんに親近感を感じるのだが、しかしシライさんは少年とは異なり、祖父の死をどのように悲しめばよいのかわからなかったわけではない。知り合いが父しかいないための居心地の悪さであり、実際通夜の後には、写真とお酒が手伝って、あっさり大人の仲間に入ってしまった。

シライさんは、十二年前に漁師の祖父を取材する中で漁師になることを嫌がる父と会い、そして今回は漁師の父と少年とに会った。少年に漁師になるのを嫌がっていた父の話をし、「三代で船に乗れたらうれしいことです」という祖父の年賀状を見せたシライさんは、少年も漁師になることを期待していたのだろう。「タオル」には、漁師という生き方を三世代で継いでいこうとする少年たちをシライさんが見つめるというもう一つの物語も描かれている。

まだ幼い少年は「フリーガーになりたい」と正直に答えるのだが、シライさんは笑って受け止める。「ボクに会えたから、やっぱり来てよかったなあ。」というシライさんにとっては、父がそうだったように、少年も時間をかけて漁師の生き方を選ぶはずだという余裕があるのだろう。シライさんは少年たちの生き方に介入することはなく、写真を撮影し、見つめるだけの観察者である。少年が祖父のタオルを額にきつく巻き付けた時、シライさんは絶妙のタイミングでカメラを取り出し撮影する。それは、少年にとっては祖父の死を受け止め、当事者として悲しみを実感し、涙を流す行為だったが、シライさんにとっては、漁師の生き方が受け継がれていく現場に立ち会ったような思いがしたのかもしれない。

「タオル」は、祖父の死にどのように向き合うかという葛藤を抱える少年の物語であると同時に、漁師という生き方を三世代で継いでいく現場に立ち会うシライさんの物語でもある。そして、どちらの物語にも祖父のタオルが大きな意味をもっていた。少年にとってタオルは祖父そのものであり、シライさんにとってタオルは漁師という生き方を表すものであった。